



はじめに

私は2008年10月22日から11月6日の16日間、カリブ海の島国キューバ共和国に滞在していた。今回のレポートでは社会主義国家キューバの現状と私自身が感じたことを報告したいと思い、このレポートを執筆することとなった。

※このレポートが現地のキューバ人や他の旅行者から聞いたことを元に作成しているのでスペイン語、英語を間違えて理解し、事実と異なった情報を記している可能性が十二分にあるので注意が必要である

## 1. 基本情報

面積：110,922 平方キロメートル（本州の約半分）

人口：1,124 万人（2007 年国家統計局）東京は 1257 万

通貨：CUC と CUP 二重通貨制

主に外国人が使用する兌換ペソ（CUC）とキューバ人が使うキューバペソ（CUP）があり、1CUC=24CUP。1CUC=約 120 円

GDP：315 億 9000 万ドル(85 位)

一人当たり GDP：2,600 ドル（日本は約3万5千ドル）（2007 年国家統計局）

経済成長率：7.5%（2007 年国家統計局）

物価上昇率：2.8%（2007 年国家統計局）

失業率：1.8%（2007 年国家統計局）

言語：スペイン語

民族：スペイン系白人 66%、ムラート（黒人と白人の混血）22%、黒人 12%

宗教：カトリック、黒人の中にはアフリカ土着宗教の人も多い、無宗教も多い

気候：亜熱帯性海洋気候で乾季は 11 月～4 月、雨季 7～10 月頃

ハリケーンは 9 月から 10 月にかけてやってくることが多い

データ参照)

外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cuba/>、

富永マップ

# 1. 旅について

## 1.1 旅のルート

今回の旅ではハバナ 2泊→ヴィニャーレス（下記地図の Pinar del Rio の北）1泊→（車中泊→）グアンタナモ 2泊→バラコア 1泊→（車中泊→）トリニダー 2泊→サンタ・クララ 2泊→ハバナ 3泊というルートで回った。キューバの端から端まで回った形となった。



(<http://travel.jp.msn.com/overseas/guide/basic/summarymap.aspx/globalareaid=3/countryid=309/>)

## 1.2 日々の生活

食：キューバでは食のレパートリーが非常にさびしい。レストランを避け、安く済ませるには基本的に米とパン、肉、ピザ、パスタという選択肢しかなかった。パスタは茹で過ぎたふにゃふにゃになったのものが主流であり、ピザにはチーズしか入っていないこと（メニュー名はチーズ入りピザ！）がほとんどである。キューバでは野菜不足が深刻である。加えて今年は特にハリケーンの影響もあり、ミックスサラダを頼んでも茹でたインゲンしか出ていないようなこともあった。市場もがらがらであり、置いてある野菜はにんにく、モヤシ、グアバのみであった。観光客向けのレストランでは他の野菜も食べられる様なので、全くないのではなく、一般人までまわす量がないようだ。

住：泊まった場所はホテルではなく、カサパティクラールと呼ばれる民宿のよう、キューバ人の家に泊めてもらう形式のところであった。キューバ人の家にホームステイをしているような感覚で泊まれることができるのが大きな特徴だ。一泊（朝食付きで）10CUC～15CUCで泊まれることができる。ホテルだと安くても50CUCぐらいかかってしまうので宿泊費を抑えられる上に現地の人を知ることができる利点がある。

移動：都市間の移動は外国人専用のバス会社を使わなくてはいけなく、値段が高い。首都ハバナから第二の都市サティアゴ・デ・クーバまでは51CUCかかってしまう。さらに便

数が少なく、冷房をガンガン効かせるので常夏のキューバで唯一の冬がこのバスの中にある。T シャツ・短パンで乗車した私は寒すぎて一晩中震え続け、おなかを壊してしまった。また都市内ではタクシーを使わずに、ローカルバス（180人乗りがラッシュ時の山手線並みにぎゅうぎゅうになる）やマキナと呼ばれるアメ車タクシー（本当は外国人を乗せるのは違法だが学生だと乗れる。価格はタクシーの半分以下）、馬車を主に移動手段として利用した。庶民の足としてはヒッチハイクが政府が奨励しているくらい盛んで、ヒッチハイク通学しているという大学生にも会った。私自身もレンタサイクルで海を目指した帰り道で自転車が壊れ、しかたなくヒッチハイクで街まで戻るという経験をした。キューバでは計3回ヒッチハイクに成功した。そしてそのどれもが手を上げた瞬間に止って乗せてもらった。

写真1 屋台のピザ 5cup(約 25 円)



写真2 コングリ（赤飯のようなもの）120 円



### 3. 貨幣について

#### 3.1 兌換ペソ導入の背景

基本情報の部分でも述べたように、現在キューバでは2種類の通貨が流通している。セウセと呼ばれる兌換ペソ(CUC)とペソクバーノと呼ばれるキューバペソ(CUP)である。もともとキューバでは外貨の所持を禁止していたが、ソ連崩壊に伴う経済危機に対応するために米ドルをはじめとした外貨所持解禁政策を行った。外貨の所持を認めることにより海外からの親族訪問を促し、親族が衣類や履物、医薬品などの必需品、米ドル現金などを持ち込むことで、物資が政府の財政負担なしにもたらされるので少なくともそういう親族がいる国民の物質的な欠乏状態を緩和する狙いがあった。この1993年の外貨所持解禁以降キューバ経済の米ドル化が進み、海外に親族を持つものとそうでないものの所得の差が拡大することとなった。その後観光業などが盛んになり、一時期の危機的な状況を脱したキューバ政府は次の段階として敵国であるアメリカのドルの使用する代わりに、兌換ペソを導入

する。この背景にはアメリカ政府のキューバに対するドル流通の制限といった経済制裁をかわすという狙いがあった。

アメリカドルと兌換ペソの交換比率にもからくりがある。

例えば私がメキシコに帰国する日(11月6日)の両替所の為替レートでは

1€=1.14CUC

1\$=1.16CUC となっていた。

この日の外国為替相場では 1\$=1.2€ であったので本来であれば、

1\$=1.26CUC になるはずである。しかし実際には 0.1CUC 分少なくなり、1割近い大幅な手数料(計算するとそうなるだけで手数料とはされていない)が国庫に納められていることになる。この政策が政府の財政赤字、累積債務問題を解決する。米国からの経済制裁により世界銀行やIMFにも加盟していないキューバでは海外からの資金調達が困難であり、この政策により外貨を国内に吸収できる。

### 3.2 二重貨幣について

では実際に貨幣が二種類存在する生活はどのようなものであるかを伝えたい。キューバに渡る前はややこしく、間違えてしまうのではないかと心配であったが、現地に行くとそんなに問題にならないことがわかる。CUCとCUPでは24倍の価値の差が存在するので3時間くらい町を歩いて物価の感覚を掴んでしまえば、収納する場所を分けるなどの工夫を施せば混乱することもない。

主にCUCは外国人用であり、観光客が泊まるようなホテル・casa・レストランではCUC払いが普通である。加えて町にあるドルショップと呼ばれるコンビニのような商店でもCUC払いである。逆に現地の人が通うような食堂(通称:人民食堂)や屋台のお店ではCUP払いとなっている。あるキューバ人の話では生活に必要なもの(必需品や公共料金)はCUP払いであり、ちょっとした嗜好品はCUC払いになっているということであった。そして貨幣を二種類に分けたことである問題が起きている。

それはCUCで収入が得られるようなレストランや宿を営んでいる人と現地の人用の商店を営んでいる人では所得の差が生まれるようになる。この二重貨幣の存在が平等を重んじる社会主義国キューバに貧富の差をもたらすこととなった。

## 4. 社会主義について

### 4.1 社会主義国家誕生の背景

社会主義国家キューバがいかに誕生したか、簡単に説明したいと思う。

大航海時代からスペイン領となっていたキューバは独立を望み、その過程で独立を支援するアメリカの援助を受ける。1898年米西戦争を経てキューバは独立を果たすが、実質的にはアメリカの保護国となった。その後のキューバでは精糖産業など多くのアメリカ資本の会社が作られ、現地民は苦しい生活を強いられ不満がたまっていた。その不満が爆発し、クーデターなどの政治的な混乱が続く中、バティスタ軍事政権が誕生した。バティスタは独裁者となりアメリカの支持を背にアメリカ企業のキューバ進出はいつそう進める。この

バティスタ政権を倒したのがカストロやゲバラ率いる革命軍であり、キューバ革命である。キューバ革命は独裁者バティスタに対して、カストロら若者が社会正義と民主主義、対米従属からの自立を求めた民族主義的な革命であった。カストロは最初から共産主義の革命を進めたわけではなく、アメリカ政府はキューバ新政権を承認した。しかし革命成功後、キューバ政府は農地改革法を公布し、アメリカ企業の所有する大農園を農民に分配した。農地改革を行えばアメリカが報復するとわかっていたがカストロが断行した。アメリカはキューバの主要産業である砂糖の輸入を制限すると脅した。ここでソビエト連邦が出てくる。ソ連はアメリカからの被害をすべて補填するような政策を取り、キューバとの関係を強化した。今日まで続くアメリカ政府のキューバに対する経済制裁が始まった。いい意味でも悪い意味でも米ソの綱引きの中で、歴史の中で翻弄されたのがキューバだとも言える。

#### 4.2 革命後社会主義になりどのように変わったか

革命後キューバは中南米一の教育、福祉国家となった。革命前は国民の3分の2が字が読めなかったが30年後には識字率は98.5%まで上がった。授業料は幼稚園から大学まで完全に無料であり、病院での治療費も払う必要がなくなった。そして医療水準は最高水準に達し、平均寿命は革命前の50歳から74歳に上がった。中南米のほとんどの国でスラムが広がるが、キューバにはない。治安の良さは中南米一だと言われている。

#### 4.3 実際の社会主義の印象

実際にキューバを訪れると目を背けたくなくなってしまうような絶対的な貧困がないこと、ストリートチルドレンなどがいないことが他の途上国と違うことがわかる。現地の人のお話を聞くと今にも倒れそうな家に住んでいる人もいるがテレビや冷蔵庫、最低限の食糧は国から支給されるので生活は何とかできているという。「健康で文化的な最低限度の暮らし」というのはできているのではないかというのが私自身の実感としてある。基本的にキューバでは道を歩きながら民家の中を覗ける（ドアや窓を全開にしている人が多い）ようになっている。家の中で音楽をかけながら踊っていたり、テレビをひたすら見ていたり、揺れるいすに座ってただ揺れている人が実に多い。生活に困っている様子はほとんど伝わってこない。

キューバに着く前は社会主義と聞くと富の分配を行い「平等」というものが保たれているというイメージを抱いていた。ただ意外と「貧富の差」が存在することに気がつく。町ではiPodを代表する高価な電子機器を持っている高校生に出会ったり、ハバナではデパートのような建物もあり液晶テレビなども販売されていた。その一方で裸足で駆け回る少年（割れビンなどのゴミが散乱しているので危険）がいたり、何箇所も穴の開いたぼろぼろのTシャツを来た人もいる。勝手ながら誰もが等しく貧しい生活をしているイメージがあったので、少し面を食らった格好となった。政府はなるべく格差が出ないように高い税や規制で平等を保とうとしているようだが、実際は兌換ペソの導入や個人営業を認めたことにより差が開きつつあるようだ。ジニ係数を調べてみても1986年の0.22から1999年には0.407に上がっている。

キューバでは平日の昼間から暇そうに町を歩いたり、昼間からバーで飲んでいる人が驚くほど多い。この人たちは仕事をしているのだろうかという疑問を持つことがすごく多い。全体的に一生懸命仕事をする人を見る機会が少ない。最低限の生活が保障されていること、

低賃金のため働く意欲がわからないことがその原因だと考えられる。社会主義らしいといえ  
ば社会主義らしいの一面である。

教育や医療水準に対しては国民自身が誇りに思っているらしく、そのことについて誰しもが誇  
らしげに語る。幼稚園から大学まですべて無料であり義務教育は18歳までであるという。し  
かしすべて無料であることには「質」という面で弊害があるようにも感じられる。病院を通り  
がかったときのことだが、中を覗くと人であふれかえっている様子であった。各個人に詳しく  
話を聞くことはできなかったので確証はないが、中には病院に行く必要もない人が交じってい  
るような気がした。教育についてもすべて無料の弊害として質の低下があるように感じられる。  
キューバでは英語が全く通じないことが多い。一度だけ泊まったカサ（民宿）に英語をネイテ  
ィブのように流暢に話す人がいたので話を聞いてみたが、大学の勉強では全く身につかないと  
思ったので個人的に先生をつけて勉強したと語っていた。ハバナ大学で現地の大学生にインタ  
ビューしに行ったときも英語を話せないひとがほとんどであった。アメリカと関係が悪い国で  
英語を話す話さないで教育の質を測ることに意味はないかもしれないが、無料であることがす  
べて素晴らしいかというところでもないような気がした。政府の財政を必要以上に圧迫してい  
る可能性も十二分に考えられる。

## 5.環境について

### 5.1 首都ハバナの公害問題

首都ハバナの排気ガスによる大気汚染は深刻な状況に  
あるように思える。まず走っている多くの車 1950 年  
代～1960 年代のアメ車であり、排気ガスの量が尋常  
ではない。車不足で買い換えるお金も無い人の多いキ  
ューバでは革命以前の車を修理しながら今でも大切に  
使っている。中には 1930 年製のフォードも走ってい  
る。一台一台がもうもうと煙を吐き出しながら走って  
いる。環境基準という概念が無いように思える。しか  
し晴れている夜は星が綺麗に見える。車の総数が少な  
いので大気汚染というほどのものではないのかもしれないが、喘息持ちの私には正直つら  
かった。キューバの 2004 年の 1 人当たり二酸化炭素ガス排出量は年間 2.16 トンであり、  
世界では 81 位である。



### 5.2 太陽光

ヴィニャーレスという田舎町で自転車を借りて絶景を求めて走  
っている時に太陽光発電のパネルが全ての家に設置されている  
エリアを通りかかった。トイレを借りるついでに家のおばちゃん  
と少し話しをしたが、電気が届いていないこの地域には国が  
太陽光の発電パネルをただで設置してくれるようだ。



### 5.3 有機農業先進国

意外なことにキューバは有機農業においては先進国である。というのもソ連崩壊後、食料もエネルギーも医薬品も輸入に頼っていたキューバは農薬も輸入できなかつたという理由で有機農業が普及した。現在では全農地の3割以上が完全有機で営まれようなり、それ以外もほとんどが環境保全型農業となっているようだ。

実際にキューバを訪れた食品安全会議の川田純子さんはそのレポートの中で以下のことを報告している。

- ①国の筆頭農業研究機関が、ここ数年都市農業の研究に最も力を入れているように、国をあげて有機農業の推進に取り組んでいること
- ②地球環境ばかりでなく、人類の存続可能をも含めた持続可能な社会づくりを目指し、その具体策の一つとして今後も有機農業を推進していく姿勢であること
- ③家畜の堆肥やミミズ堆肥を土に混ぜた有機質の土がスコールで流出しないようにするため金属性や木製の板等で囲いを行い、その囲いが何列にも並ぶ方式（「オルガノポニコ」と呼ばれる都市「農園」）で、多品種少量生産を行っていること
- ④土地制度改革や流通制度改革を行い、都市農園で農産物を栽培する農業者が、国民の平均収入の数倍の収入をあげており、農業が魅力的な職業となっていること
- ⑤今後は有機農産物の輸出も目指しているが、国際認証基準に迎合せず、キューバ国内の認証基準で充分だとする反グローバルの姿勢であること
- ⑥ホテルから出た生ごみは家畜の餌として収集し、その餌を食べた家畜の糞を有機肥料としてリサイクルし、作った有機野菜をホテルの観光客に提供する地域循環システムをつくっていること
- ⑦まだ少数であるにしても、家庭や小学校などで、家畜の糞尿から発生させたメタンガスを生活利用するバイオガス研究にも取り組んでいること

今回の旅では野菜自体を目にすることが少なかったのがキューバが有機農業先進国であるという実感はまったく無かった。また今年は特にハリケーンの当たり年であつたらしく特に野菜が採れていないようだ。

## 6. キューバ人の海外渡航

### 6.1 キューバ人の海外

キューバ人は日本人のように自由に海外へ行くことができない。外国へ行くにはその国に家族がいること、またはその国の友人からの招待状があることが必要になる。実際に招待状を受け取った後も、仮に私がキューバ人を日本に招待すればそのキューバ人は在キューバ日本大使館でビザを取る必要があり、日本大使館やキューバ外務省らによる何重もの厳しいチェックを通らなければ異国の地を踏めない。

それ以上に高い航空券を購入するお金がある人が少ないと経済的な理由もあるが、海外へ行くキューバ人は少ない。

## 6.2 キューバ人と外国人

キューバでは外国人と一緒にいるところを警察に見つかり、そのキューバ人が職務質問を受け、場合によっては逮捕される。実際に旅の途中でであった旅行者の中にも仲良くなったキューバ人が逮捕されてしまい、警察署に行ったという人もいた。私自身も仲良くなったキューバ人と街を歩いているときに警察が見え、距離を開けようよと言われたこともあった。これには旅行者の安全を守るという理由のほかに、キューバ人の亡命を阻止するという狙いがあるようだ。

## 6.3 キューバ人の本音

ハバナ大学であった大学生は自分もあなたのように自由に世界を旅してみたいと言っていた。でも同時に法律だからそれはできないとあきらめてしまっているようであった。現在キューバでは海外へ亡命したいと考えている人が貧しい人にほど多いとされている。裕福な人はお金さえあれば何でも手に入る国なので、国内に留まることを考える人が多いという話も聞いた。

## 7.感想

キューバでは経済的にさまざまな問題を抱えているが生活や教育、医療の心配をしなくてよいという他国には珍しい特徴を持っている。英シンクタンク nef による自己申告による生活満足度などにより幸福度を測るランキングではキューバは 6 位(日本は 95 位)であり、ラテンの陽気さで幸せだと感じて暮らしている人が実に多いという結果が出ている。しかし私自身はキューバ人になりキューバで暮らしたいとは思わない。さらにキューバ人全員が幸せに暮らしているとも思わない。実際に会った人に国を出たいと思っている人がこんなにも多い国が「幸せ」なのかと疑問を感じてしまう。

キューバ滞在中は楽しい出来事がたくさんあった。美女にサルサを踊らされたり、現地の学生とラム酒の飲み比べをしたり、明るく陽気で親切な人たちにたくさん出会った。それらはこの国の「陽」の部分であるのだろう。「陰」の部分は思想や発言などの自由が全くないことやモノが極端に不足していることにある。国内には遙か昔の革命を讃える看板や落書きであふれ、自分たちは間違っていないのだということを信じ込ませようとしてる印象をどうしても持ってしてしまう。この陰の部分が私には強すぎるのだろう。

とはいえ教育や医療、治安といった生活の地盤は整っている国なので、革命が成功し、次のステップに進む段階に来ていると考えられる。今後政治体制や指導者が変わるなどの大きな変化があれば大きく飛躍する国のような気もした。また 20 年ぐらいしたら来てみたい国である。

最後になってしまったが私はこの国が大好きである。旅行をするには不便なところが多々あるが、キューバでしか味わえないような経験ができ、いい人やタカリ君（おごれおごれとたかってくる方々）に会いながら毎日いろいろな疑問が浮かび、考える楽しさを味わう

ことが出来る。

旅行中に会ったキューバに行った日本人の中には「あんな国二度と行かない」と言っているような人もいたので、国の印象という本当に人によって違うものである。是非自分の足で訪れ、自分の心でキューバを、多くの人に感じて欲しい。

## 8.参考文献

反米大陸 ―中南米がアメリカに突きつける NO! 伊藤千尋 集英社新書 2007

Cuba by Brendan Sainsbury Lonely Planet; 4 edition (November 1, 2006)

外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cuba/>

21世紀におけるキューバ経済―前進と挑戦

<http://www.rieb.kobe-u.ac.jp/academic/ra/seminar/2005/seminar-details/20051216Perez.pdf> -

ECONOMY-CUBA: Does the Ration Book Still Make Sense? By Patricia Grogg

<http://www14.plala.or.jp/Cuba/IPS20080520.htm>

経済社会データランキング <http://dataranking.com/table.cgi?LG=j&TP=ee02-1&RG=6&FL=>

IMF (2007年4月) World Economic Outlook

Real Instituto Elcano <http://www.realinstitutoelcano.org/analisis/881.asp>

キューバ共和国の有機農業視察報告<http://www.pref.gunma.jp/shokukaigi/09diary/houkoku.pdf>

## 9. 旅で感じたこと

最後にレポートとは関係なく最近自分自身が感じたことを2つだけ紹介したい。

### 1. インターネット

キューバにいる16日間は一度もインターネットにアクセスすることが無かった。旅の間もネットが無料であったり緊急の要件がない限りインターネットの利用を週に一度に限定している。この生活は不便ではあるが考える時間がものすごく多く、浮かび上がった疑問と長い間向き合うことが出来る。日本にいるときは疑問が浮かんたらすぐにGoogleで検索して簡単に答えを見つけ出してしまっていた。情報化社会に頼っていた自分を反省するきっかけになった。一度ネットから離れて生活してみるのもいいかもしれない。

### 2. 自分の意思でお金を払って勉強をすると身につく

旅に出て少しした後、私はカンクン(メキシコ)の語学学校1週間通った。ホームステイを含め1週間で3.5万円以上かかってしまった。この期間、1日5時間の授業があつという間に感じられ、家に戻っても予習復習を行うというミラクルが私に起きた。小学校時代から体育以外の授業では常に教室の時計が壊れているのではないかと疑い、5分ごとに時計を見ていた私がある。支払ったお金の分をきっちり学んでやろうというインセンティブの強力さに驚いたのと同時に、今まで授業料を支払っていた両親に申し訳ない気持ちと思う。

写真



機体から煙が出るクバーナ航空とファンキーな兄さん



キューバの母 (4人のうちの一人)